

## BOOK REVIEW

「生物物理学ハンドブック」  
石渡 信一，桂 勲，桐野 豊，美宅 成樹 [編] 朝倉書店

久保 義弘 (自然科学研究機構生理学研究所 神経機能素子研究部門)

B5版ハードカバー 680ページのこの本が届いた時の第一印象として、ハンドブックというよりも教科書もしくは事典みたいだと思った。200名近いエキスパートの方々のご執筆によるものなので、ここでは、個々の内容についての紹介はせず、本全体についての包括的な印象を記す。

以下の5つの点を本書の特徴と感じた。(1)教科書の章立てと事典の項目の、ほぼ中間程度のスケールの項目が建てられている。この項目の建て方が、この本の性質を決定づけ、成功に導いていると思った。(2)カバーしている領域が、極めて広範にわたっている。項目の印象としては、生理学、細胞生物学、分子生物学、生化学、構造生物学、計算科学、そして方法論等の学問分野に関連するものが包含されており、それらが、生物物理学という心棒を通してまとめられている。そのため、斬新な印象があり、柔軟性に富む生物物理学の魅力を再認識した。(3)記述が、格調高く厳密である。平易でなじみやすい解説と言うよりは、これを読めば、基礎知識、背景を含め、必要とされる正確な情報が得られるといった安心がある。(4)新しい研究の進展にも充分に対応している。古典的な事項の記載に終始しているわけではなく、ここ数年の文献の引用も多数含まれている。(5)多数の執筆者による分担執筆であるにもかかわらず、記述のスタイルが一貫しており、ぶれが無い。これは、執筆者の方々のみならず、編者の方々、出版社の方々のご尽力の賜だと思う。

あえて惜しむべき点をあげれば、本文が単色刷りであることだろうか？本の定価を高くしないた



めには止む無しを得ないことと思うが、色がついていれば、読むのがより楽しくなるように思った。

この本の序に、「生物物理学とは何かという問いは、この新しい学問領域が背負うべき永遠の問いであろう。躍動する生物物理学には新たに開拓され広がりを見せている分野がある一方で、生物物理学誕生から50年が経過した今、確立した分野もあるはずである。この機会をとらえて、教科書に準じるハンドブックを刊行し、生物物理学という学問領域全体を俯瞰したい。」という旨のことが書かれている。

基礎医学の重要分野としての生理学は、すでに確立されているとあってよく、医学生を主たる対象とした優れた教科書が多数出版されている。しかし、科学としての生理学は、生物物理学と同様、

関連する研究分野や研究手法の進展に伴って躍動しており、生命現象を対象とする科学はすべて広義の生理学ともいえる時代である。このような中、躍動する生理科学という学問領域全体を俯瞰する

ための、これまでの臓器別の記載といった枠組みに囚われない、新しいスタイルの本も増えていくといいなと思った。